

特集 双極スペクトラムを巡って

双極スペクトラムを巡って

野村 総一郎

精神障害の生物学的病態が未解明である以上、現状ではその分類法についても確固としたものは存在しない。逆に言えば、全くの想念上では好きなことがいくらでも言えることになるが、説得力を持つ分類法を構築することは容易でない。最近、一種の流行のように語られるのが、「スペクトラム」概念である。これは本来物理学的な概念であり、無色のように見えていた光が、プリズムを通せばいくつもの光の帯に分かれる現象を指すのだが、精神医学分類として用いられる場合には、むしろこれとは逆に「別々のように見える病気でも、実は病態的には共通点があり、大きなファミリーとして考えた方が良い」という考え方として提唱される。

そもそも、精神障害を考える時、2つの切り口があったように思われる。もし全く異なる病気なら、カテゴリーが異なる、とみなされ、鑑別が臨床的な勝負所となる。逆に同じ病気だが程度が異なるというのなら、重症度をどう扱うかという問題となって、おそらく評価尺度を用いて点数をグラフの上にプロットしたりすることに意味が出てくるであろう。スペクトラム分類というのは、この2つの考え方の中間であるとも言える。連続する程度問題と言えるようにも思えるし、それにもかかわらず別のカテゴリーとして扱われてきた歴史もある。そのような病気の共通点と異なる点を考えることで、新たな病態仮説、治療戦略上の発見がもたらされるという期待も湧く。スペクトラ

ム概念はこの段階での精神医学にとって、まさに自己発見的な価値 (heuristic value) があるかもしれない。

しかし手放しのプラス面ばかりではあるまい。スペクトラム概念は本来「区別すべきもの」という性格をもっている、どうしても「結びつける」という観点が強調されがちで、病気の範囲が広がるリスクがある。時に正常心理の領域にも広がりうる可能性をもっている。そうすると、「心の問題」の過剰な医学問題化がもたらされ、薬物療法が過剰に行われかねない。言うまでもなくスペクトラムにしても、一種の仮説である。それを用いる時には慎重な検証が必要であることは間違いない。

スペクトラム分類は強迫スペクトラム、自閉症スペクトラムなど、多くの領域で言われるが、気分障害の領域で国際的にみても盛んに提唱されているのが、双極スペクトラムの概念である。この考え方も、欧米の権威筋が言っているのだから間違いない、という単純な姿勢ではなく、我が国の医療環境や文化風土に合うのかということも含めて、真摯な検証を要する課題と見なすべきである。この特集はそのような観点から企画された。双極スペクトラムについてはこれまでもいろいろな雑誌で特集が組まれているかと思われるが、今回は精神病理学の理論、治療論、臨床的な観点から、偏りのない、非常に深みのある論考が得られたのではないかと自負している。

第107回日本精神神経学会学術総会=会期：2011年10月26～27日、会場：ホテルグランパシフィック LE DAIBA、ホテル日航東京

総会基本テーマ：山の向こうに山有り、山また山 精神科における一層の専門性の追求

シンポジウム 双極スペクトラムを巡って 座長：寺尾 岳（大分大学医学部精神神経医学） コーディネーター：野村 総一郎（防衛医科大学校精神医学講座）